

上田 勉

新型コロナウイルスの非常事態宣言で、外出を控え、経済や学校生活、医療や介護、営業や文化活動等に様々な影響が出ています。今回の通信は、皆が少しでも勇気が出れば、という思いで書きました。

#### ◇自分たちで生命を守った村 岩手県沢内村

「沢内村は、県都一盛岡市の西南に位置する奥羽山脈の山すそにある山村です。豪雪地帯で、12月から4・5月までは雪で、交通は途絶し穴ごもりになる僻村です。それ故に長い間無医村で、貧困と病気のしがらみの中に閉塞していました。

深沢晟雄は、「野蛮条件—赤ちゃんがコロコロ死んでゆく。雪道をテクテク歩く—の解消がすべての行政に先んじなければならぬ」と訴えて、村長に就任しました。

深沢村政はまず弱い層の人々を優先させました。村ぐるみの保健活動に立ち上がり、ブルドーザー1台を購入して、雪を克服しました。昭和32年には、赤ちゃんが出生千名に対し70、80名の割合で死んでいたのが、昭和37年には乳児死亡率0を記録しました。70歳以上の老人に対する年金の支給、国民健康保険も10割給付を実現し、乳児と老人の医療費を無料にしました。

さらに地域的にいえば村の中心部よりも、周辺部—山ふところや谷合いにある部落にまず目を注いだということです。役場庁舎が県下一のオンボロ庁舎であるにもかかわらず、まず全部落に公民館を建設しました。そして、水田を倍増して、村は再生しました。

要約すれば、深沢村政は、安い労働力（人間としてではなく）の供給源地でしかなかった乳児多死の農村を、健康的な住みよいわれらの村、人間としての生活のできる村、そのような村に取戻そうとしての村造り運動でした。いわば人間復帰の村ぐるみの闘いであったということが出来ます。と同時に、住民を横に結合して推進した保健活動は、地方自治体を住民のための自治体とする運動、つまり民主化運動であったともいえると思います。」（菊地武雄著『自分たちで生命を守った村』岩波新書）

#### ◇岩手県には市町村立病院は無い 県立病院と県立診療所があるので

岩手県には市町村立病院はありません。各市には県立病院があつて、各町村には県立診療所があるからです。

東日本大震災の津波では、多くの犠牲者が出るとともに、病院も大きな被害に遭いました。宮城県と福島県の病院は、救助や支援を県や医師会に求めざるを得ませんでした。一方、岩手県は県立病院なので、翌日には自主的に内陸部の病院から沿岸部の病院へ、医師や看護師等を派遣して、またガソリンや軽油を供給することが出来ました。

#### ◇岩手県は新型コロナウイルスの感染者は0（3月26日現在）

岩手県は新型コロナウイルスの感染者は0です。原因は、過疎地であるとか閉鎖的であるからではありません。私は岩手県には、“自分たちで命を守った村”という意識が現在も息づいているのでは。②県民の医療について、市町村任せではなく県が責任を持

っていることも、感染者が0の原因ではないか、と思います。

小池都知事は毎日マスコミに出て訴えています。しかし、達増（たっそ）岩手県知事はほとんどマスコミには出ません。私は達増県知事が「岩手県は今日も感染者が0です。学校は平常通りに授業をしています。」という記者会見をして、日本や世界の人達を勇気づけてもらいたいです。



【豪雪と貧困の沢内村を人間の健康と住民自治の村にした一故深沢晟雄村長】



【故深沢晟雄村長と沢内村を描いた映画「いのちの山河～日本の青空Ⅱ」  
大澤豊監督、長谷川初範・とよた真帆・加藤 剛主演】